

ローマ人の死生観

—古代ローマの墓について—

島 創平

はじめに

「ローマ人の死生観」という問題提起は、あまりに漠然としていて、この問題について本格的に論ずることは、時間の点でも筆者の能力の点でも到底不可能である。そこで今回は、今年度の連続講座の統一テーマと関連させて、「ローマ人の生と死の表現」というテーマに関わる問題として、古代ローマの墓の問題について、少し考えてみたい。

さて、ローマ人の墓の問題を初期キリスト教という観点から考えると、先ず念頭に浮かぶのはカタコンベ（地下墓地）の問題である。一般的な通説では、カタコンベは、ローマ皇帝礼拝を拒否したため迫害されたキリスト教徒が、信仰を守るために地下に建てられた秘密の集会所である、というようにイメージされてきた。しかしこうしたイメージは、現存しているカタコンベの実態から見て、疑問がある。

まず第一に、カタコンベは、ローマなどイタリアと北アフリカのいくつかの都市の周辺にしか見られず、当時キリスト教が最も普及し、それゆえ迫害も激しかった小アジアなどには見られない。

第二に、カタコンベの入口は通常大通りに面しており、決して秘密の場所ではなかった。またローマ市においては、墓地は神聖不可侵の場所であり、墓荒らしは神聖冒瀆の罪で罰せられた。

第三に、カタコンベは何よりもまず死者の埋葬の場所であり、信者の集

会が開けるようなスペースはなかった。またそこは、死体の発する悪臭ゆえに、礼拝所として使用するには不適切であった。

以上のように、カタコンベに対する一般的なイメージには、いろいろな問題がある。一体カタコンベは、いつ頃から、何のために建てられたのだろうか。果たしてそれは、キリスト教徒の迫害を避けるために造られたのだろうか。こうした問題に関して、ここでは最初期のカタコンベである「ドミティッラのカタコンベ（後1世紀末）」について考えてみたいが、その前にまず、ローマ人の「死後の生」についての一般的な考えについて、見ていきたい。

「死後の生」についてのローマ人の考え

1世紀半ば頃に書かれた、ネロ帝時代の風刺小説であるペトロニウスの『サテュリコン』の中で、解放奴隷上がりの富豪トリマルキオは、彼の豪華な饗宴の最中に骸骨の模型を持ち込ませ、

「ああ、われらはなんと哀れな奴か。人は皆空の空。

死神オルクスがわれらをさらっていくと、みなこうなるのさ。

されば、元気なうちに楽しもうではないか」

（『サテュリコン』34 國原吉之助訳）

と慨嘆する。このような一種虚無的な人生観を述べる一方、自分の墓については、

「大の仲良しのハビンナスよ、わしの墓は、あんたに頼んでおいたように建ててくれとるな。しっかりお願いしとくよ。（……）そうできたらあんたの親切のおかげでわしは死んだあとも生き続けるだろう。

(……) じっさい、生きとる者のために家をでかでかと飾り立て、現世よりもはるかに長く住まねばならん家の方を粗末にするなんて、まったく間違っている (71)。」

と頼んでいる。このように、一部の哲学思想を除いて、ローマ人は一般に、死後の生や靈魂の存在については、肯定的であった。死者は墓の中で生き続け、地下においても生前と同様な生活を送る。それゆえ、墓には大抵「死後の生」をより快適にするための副葬品が埋葬された。

一方、墓を持たず、埋葬されなかった人々の靈魂は、来世での安息が得られず、死体の辺りをさまよひ、人々に害をなすと考えられていた。ゆえに放置された死体の埋葬は当時の人々の敬虔の行為であり、キリスト教会においても、それは慈悲のわざであった。

このように、古代のローマ人にとって、自分の墓を確保することは大きな関心事であり、彼等は自分たちの階層や財力に従って、様々な墓を造営した。上層の富裕な人々は、時には壮大な記念碑のような墓を造営した。例えば、前1世紀末に建てられたガイウス・ケスティウスのピラミッド形の墓は、高さ27メートル、基礎部分は22メートルもあった。(図1) こうした富裕者の墓として、最も大規模なのは、言うまでもなくローマ皇帝の墓であり、アウグストゥス帝は生前から自分の墓を建てさせた。(図2) これらの墓は、大規模なものも含めて、ほとんどが個



図1 K.ホプキンス『古代ローマ人と死』より転載。



図2 K.ホプキンス『古代ローマ人と死』より転載。



図3 クリス・スカー『ローマ帝国』より転載。



図4 クリス・スカー『ローマ帝国』より転載。

人専用の墓であって、ローマでは数世代にわたって家族が同じ墓に葬られる例は、非常に少なかった（例えば、来たイタリアのアクィレイアの発掘では、三世代以上にわたって葬られている墓は発見されなかった）。こうしたローマの実状が、後述する埋葬地不足の一因となったのかも知れない。

比較的裕福な市民は、より簡素な墓碑を建てた。共和政末ころから、墓石に故人とその記念者の名前を彫り込むことが流行しだしたようで、現存するローマの墓碑銘の大部分は、紀元後のものである。（図3）

さらに一般の人々の墓は、アンフォラエ（amphorae）と呼ばれる大き

なブドウ酒用の壺であった。(図4) 人々は墓参の際、この壺の中に供物として、食物や飲み物を供えたのである。

ところで、ローマ人が盛んに墓参を行ったのは、墓の中の死者の霊には、常に水や食料が供給されなければならない、と彼等が考えていたからである。先に述べたようにローマ人は、死者は死後も墓を住まいとして生き続ける、と考えていた。それゆえ死者には、生き続けるための水分や食料が、絶えず補給されなければならない。死者達は常に飢えており、定期的な供犠式により食物や水が供えられないと、亡霊達は衰弱し、フランツ・キュモンによれば「最後にはほんとうに餓死」してしまうだろう（「死者が餓死する」とは、一体どんなことなのだろうか）。

一方ローマ人は、墓参りを励行するだけでなく、祖先の霊を弔い、宥めるための祭礼を執り行った。例えば毎年2月13日から21日までの9日間、パレントリア (Parentalia) 祭と呼ばれる祭りが行われ、この間各家庭は、霊を敬うために墓参して供物を捧げた。またこの期間は忌み日であった、婚礼などは避けられた。さらにまた、5月9、11、13日にはレムリア (Lemuria) 祭が行われた。この祭りでは、墓から迷い出て町中に出没する祖先の霊を宥める儀式が行われた。すなわち一家の家長は、出没する亡霊に黒いソラ豆を投げ与えて、亡霊を追い返す。さもないと亡霊は生きている家族を、死者の国に連れ去ってしまうと信じられた。

以上のようにローマ人は、死者は常に、食べ物や飲み物で宥められなければならない、と考えていた。

墓所の確保

しかし、上流や中流のローマ人は自分の墓を持てたが、貧しい下層民や奴隷達は、しばしば墓を持てなかった。共和政末期の都市貧民の多くは、死後は市外の合葬用の穴に投げ込まれた。こうした合葬用の穴を「プティ

クリ (puticuli)」という。特に疫病の流行などにより多数の死者が出た場合、多くの下層民が、プティクリに投棄される運命にあった。またプティクリには人間の遺体だけでなく、動物の死骸や糞便も一緒に投げ込まれた。19世紀末、ローマでプティクリが発掘された時、2000年も時を経ているにもかかわらず、ひどい悪臭で、度々発掘を中断しなければならなかったという。

このように、下層の人々が自分達の墓所を確保することは、極めて困難であった。そこで、こうした人々が墓所を確保するための方策として、ここでは二つの手段について説明したい。すなわち、①コレギウムと呼ばれる一種の葬儀組合と、②富裕なパトロンに頼る、以上の二つである。

①コレギウム (collegium)

コレギウムは元来、職人達の同業組合で、その起源は伝説上の王ヌマに遡ると言われる。ヌマはローマ人を、その職種毎に *collegia* に分属させた、と伝えられている。帝政期には、一般に組合や結社活動は、反政府運動や陰謀活動の温床となるとして、その設立を厳しく制限される傾向にあったが、コレギウムの活動は認可された。またこうした同業組合は、彼等の職業に関わる特定の守護神の礼拝と結びついていたので、一種の宗教団体としての性格も持っている。ローマ近郊の町ラヌウィウムにおける2世紀前半のコレギウム規約を読むと、前文で「我々が死者を送るに際し恥ずかしくない葬儀をなすためにそれにふさわしく、配慮の行き届いた準備をなし終えられるように」と、この組合の目的が述べられ、次いで会員の月々の支払い額や埋葬のやり方などが細かく定められている。またここでは奴隷の会員にも特別な配慮がなされている（一般にコレギウムにおいては、身分上の差別はほとんどなかった。奴隷や解放奴隷が組合の会長を務めることも珍しくなかった）。

またこの規定によると、コレギウムでは会員の誕生日や組合の守護神ディアナ礼拝などの際、しばしば食事会が催された。このように、コレギウムは単に葬儀のための組合であるばかりでなく、会員相互の親睦や気晴らしのための集会でもあった。

当時のキリスト教の集会も、外部からはこのようなコレギウムの一種と見なされていた可能性がある。例えば、2世紀初め、キリスト教徒裁判に関してトラヤヌス帝にあてた小プリニウスの有名な手紙（『書簡集』10.96）の中で、プリニウスはキリスト教徒の集会を、「結社（クラブ）」（*hetaeria*）の一種と見なしている。この問題については、後でまた取り上げたい。

②富裕なパトロンに頼る

さて、貧しい人々や奴隷などが自分の墓所を確保するもう一つの手段として、彼等の主人やパトロンが墓所を提供する場合があった。すなわち、富裕な有力人物は、自分の家の奴隷や解放奴隷など、自分の保護下にある人々のために、自分の地所内に、彼等のための埋葬所を建てることがあった。例えば、小アジアのスマルナ出土の、後2世紀のものと思われる碑文には、「ユダヤ人女性で、シナゴークの頭（*archisynagogos*）であるルフィナは、この墓を彼女の解放奴隷と、彼女の家で育てられた奴隷達のために建てた。他の誰も（ここに）葬る権利はない。もし誰かがそうしたならば、彼或いは彼女は、帝国の金庫に1500デナリ、ユダヤ人に1000デナリ支払う。この記録の写しは（公の）文庫に保管される（CII 741）。」と書かれている。こうした墓所では、しばしば集合理葬所の一形式——いわゆる「鳩小屋式埋葬室（*columbarium*）」（図5）が採用された。

カタコンベは、このような有力なパトロンが家人のために建てた墓所が、地下に造られるようになったもので、それゆえ、カタコンベはしばしばパ



図5 K. ホブキンス『古代ローマ人と死』より転載。



図6 U. M. Fasola, *CATACOMB OF DOMITILLA* より転載。

トロンの名を冠して呼ばれた—例えば「ドミティッラのカタコンベ」、「プリスキラのカタコンベ」、「プレタクスタトゥスのカタコンベ」など。

こうしたカタコンベが造られるようになったのは、後1世紀末頃からである。これらのカタコンベには、どのような人々が埋葬されたのだろうか。そもそもなぜ、このような地下墓地が造られるようになったのだろうか。こうした問題に関して、ここでは最初期のカタコンベの一つ、「ドミティッラのカタコンベ」(図6)について考えていきたい。

「ドミティッラのカタコンベ」

「ドミティッラのカタコンベ」は現在、ローマ市南部のアルデア街道 (Via Ardeatina) 沿い、アルデア門より3キロメートルほどの所にある。この墓所の提供者であるフラウシア・ドミティッラ (Flavia Domitilla) は、故ウェスパシアヌス帝の孫娘で、彼女の夫ティトウス・フラウィウス・クレメンスは当時の皇帝ドミティアヌスの従兄弟、二人の息子はドミティアヌスの後継者に指名されていた。このように、彼女は当時のローマの最高貴族の家柄であったが、95年に夫がドミティアヌスにより処刑された時、彼女はパンダテリア島に流刑に処せられた。この事件について、ローマの歴史家ディオ・カッシウスは、彼等には「無神論」の罪が着せられたと述べており (『ローマ史』67.14)、またスエトニウスは、クレメンスを「唾棄すべき無精者」と呼んでいる (『ドミティアヌス伝』15)。これらは何れも、当時のユダヤ教徒を示す言葉である (「無精者」とは、ユダヤ教徒の安息日の慣習を指すと思われる)。すなわち、クレメンスとドミティッラはユダヤ教徒であり、それゆえドミティアヌスにより迫害されたと考えられる。一方、エウセビオスは、ドミティッラは「キリストについて証したため」流刑に処せられた——すなわち彼女はキリスト教徒だったと述べているが (『教会史』3.18.4)、エウセビオスのこの記述は信頼性が薄い。しかし、恐らく当時のローマ人には、ユダヤ教徒とキリスト教徒の区別はほとんどできなかつたと考えられるので、ドミティッラがキリスト教徒であった可能性は、全くあり得ないというわけでもない。いずれにせよドミティッラは、ユダヤ教徒 (またはキリスト教徒) であったゆえに、ドミティアヌスの迫害を蒙ったと考えられる。

それでは彼女のカタコンベは、彼女がユダヤ教徒或いはキリスト教徒であったことと関係しているのだろうか。言いかえると彼女のカタコンベは、

通説のように、当時迫害されていた信徒のために造られたのだろうか。このカタコンベには、どのような人々が埋葬されていたのだろうか。

そこでこの問題に関して、次にこのカタコンベから発見された2枚の碑文例を挙げたい。まず第一例として、

「タティア・バウキュッラ。神君ウェスパシアヌスの7人の曾孫、フラウィウス・クレメンズと彼の妻、神君ウェスパシアヌスの孫娘のフラウィア・ドミティッラの子どもの乳母。この場所を厚意から譲り受け、私はこの場所を私の解放奴隷と女解放奴隷、そして彼等の子孫のための埋葬地とした。」(CIL 6.8974)

次の例として、

「神君ウェスパシアヌスの孫娘の父のために。」(CIL 6.949)

これらの碑文例は、共にドミティッラに言及していることから、最も初期のものと考えられる。しかもこれらの例では、いずれも「神君ウェスパシアヌス (Divi Vespasiani)」という表現が見られるので、この碑文はユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなく、明らかに異教徒に関わるものである。

このように「ドミティッラのカタコンベ」は、決してキリスト教徒（またはユダヤ教徒）のためにのみ造られたわけではなかった。それゆえ、初期のカタコンベは、本来明らかにキリスト教徒迫害とは関係なかったと言える。それではなぜ、1世紀末頃からカタコンベが造られるようになったのだろうか。その理由は、宗教的要因というよりもむしろ、主として次の二つの事情による土地不足によるものと考えられる。

先ず第一に、当時のローマ市の人口増の傾向が挙げられる。当時のロー

マは、恐らく人口100万人を超える帝国内第一の大都市であり、しかもその人口はますます増大し、市域は拡大していった。一方ローマでは、市域内に死者を埋葬することは禁じられており、しかも先述したように、ローマでは3世代以上連続して一族の墓が使われる例はほとんどなかったこともあって、特にローマ市近郊の埋葬地が不足するようになった。

こうした墓所不足の傾向をさらに加速させたのが、帝政期以来のローマの埋葬方法の変化であった。ローマでは従来、火葬による埋葬が普通であったが、帝政時代になると、本来東方の慣習であった土葬が帝国内に普及し、次第に火葬に代わる埋葬方法の主流となっていった。(例えば、ローマ近郊のオスティアのイゾラ・サクラ墓地では、2世紀初めから半ば頃までは火葬が中心であったが、2世紀後半以後、土葬が圧倒的になっていく。)言うまでもなく、火葬よりも土葬の方がより広い墓所を要する。このような要因により生じた埋葬地不足を解決するため、1世紀末頃から墓所の立体化、すなわち地下墓地が造られるようになったと考えられる。

まとめ

以上のように、カタコンベは本来、決してキリスト教徒迫害を避けるためではなく、ローマ市の人口増加に伴う土地不足や、埋葬方法の変化に対応して造られるようになったと思われる。それゆえ、「ドミティッラのカタコンベ」に埋葬された人々も、元来は必ずしもキリスト教徒とは限らず、最初期の埋葬者の中には、明らかに異教徒も多数含まれていた。

後代になると、ローマでは大貴族や富豪の没落や家系の断絶がしばしば起こった。ドミティッラの地所も、フラウィウス家の没落によって他人の手に渡り、その地上部分は農地になった。一方、地下墓地は2世紀以後も使用され続け、次第に拡大していった。2世紀後半頃から、この墓地にキリスト教徒が埋葬されるようになり、以後次第にキリスト教徒のカタコ

ンベとして発展していった。なぜこのころになると、キリスト教徒が埋葬されるようになったのだろうか。

先に述べたように、初期キリスト教会は、単に宗教的活動団体としてのみならず、当時のコレギウムと同様、信徒の相互扶助団体としての活動も行っており、それゆえ外からは、時にはコレギウムと同様に見なされた。後代になると教会自身が、自らを一種のコレギウムと自覚するようになる。2世紀末から3世紀初めにかけて活躍した教父テルトゥリアヌスは、『護教論』の中で、キリスト教会を「合法的結社」として扱うように求め(38.1)、さらに「我々は教義を一つに分ち合い、希望の絆で結ばれた宗教的連帯感をもつ一つの『結社 (corpus)』である(39.1 鈴木一郎訳)」と主張している。このように、コレギウムとしての性格を併せ持った後代のキリスト教会は、当然信徒達の埋葬地の問題にも、関心を払うようになる。キリスト教徒はユダヤ教徒と同様、死者は土葬されたから、墓地にはより広い場所が必要だった。さらに信徒の数が増加すると、教会自身が墓所を所有し、信徒はその地に葬られるようになる。こうして2世紀後半以後、カタコンベは教会の発展に従ってますます大規模になっていく。「ドミティッラのカタコンベ」も後代に新しい部分が次々と付加され、より大規模に、より複雑になっていくのである。

主要参考文献

- R. L. ウィルケン著、三小田、松本、阪本他訳『ローマ人が見たキリスト教』ヨルダン社、1987年。
- 小川正廣「死と神格化——ローマ人の「英雄崇拜」について——」『古代ローマの「死」についての総合的研究 平成2年度科学研究費補助金〔一般研究（B）〕研究成果報告書』（研究課題番号 63450051、研究代表者 長谷川博隆）、1991年、13-45ページ。
- フランツ・キュモン著、小川英雄訳『古代ローマの来世観』平凡社、1996年。
- クリス・スカー著、矢羽野薫訳『ローマ帝国』河出書房新社、1998年。
- K. ホプキンス著、高木、永都訳『古代ローマ人と死』晃洋書房、1996年。
- J. S. Jeffers, *Conflict at Rome*, Minneapolis, 1991.

Roman Views of Life and Death

by Sohei SHIMA

The Romans had to provide for their own burial places. Rich Romans spent huge amount of money to build their monumental tombs. But many poor Romans left no memorial. Their corpses were thrown unceremoniously into collective pits (puticuli) outside the city. So in order to make sure to have their burial places, they became members of co-operative burial clubs (collegia), or they depended on wealthy patrons, who provided collective burial chambers (columbaria) for them.

Later as the population of the city of Rome grew, the price of land around the city soared. And the way of burial gradually changed from cremation to interment. Consequently the shortage of place for burial became serious problem. For that reason, burial places were located underground.